

# 芥川龍之介小説のジャンル研究：小説形式と歴史 の関係について

著者	李 碩
学位授与年月日	2017-09-28
URL	<a href="http://doi.org/10.15083/00077691">http://doi.org/10.15083/00077691</a>

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 李碩

李碩氏の「芥川龍之介小説のジャンル研究—小説形式と歴史の関係について」は、フレドリック・ジェイムソンのユートピア小説論とリアリズム小説論を部分的に援用しながら、同時代の社会に対する芥川の応答がその小説作品にどのように現れているか、を明らかにする。芥川の小説に、芥川の世界性を読み取ろうとする研究には、長い蓄積がある。本論文の特色は、小説の内容だけでなく、小説の構造に社会性と歴史性の反映を見出したところにある。ある主題について小説を創作しようとするとき、芥川はその小説をどのように構造化したのか。なぜ、そのような構造をその小説に持たせたのか。そのような構造を持つことによって、その小説はどのような効果を持ち得るのか。本論文は、芥川が自らの小説に対して用意した構造そのものが、その小説が生み出された時代思潮の影響下にあることを、比較文学の視点から立証した。また、そうすることによって、芥川の創作活動が進展するにつれて、芥川の小説の構造が変化していく様子を浮き彫りにし、変化しなければならなかった理由の一つとして、芥川の世界に対する意識が想定されることを示した。

芥川が東京帝国大学で英文学を専攻し、ウィリアム・モリスについて卒業論文を書いたことは周知の事実である。比較文学の観点から芥川を研究しようとするとき、英文学からの影響を見逃すことはできない。李碩氏は日本近代文学館編『芥川龍之介文庫目録』に準拠して、芥川が接した可能性のあるテキストのうち、ウィリアム・モリスとウィリアム・バトラー・イェイツに関するものを確定し、特に重要と思われる芥川旧蔵書については、日本近代文学館で現物を確認して、書き込みの有無の調査を行った。

また、「鼻」、「羅生門」、「芋粥」など、『今昔物語集』をもとに、芥川が発表した再話作品についても、芥川がどのような資料に触れ、どのような参考文献を利用したのかを李碩氏は同目録に基づいて調査した。結果として『今昔物語集』とイェイツの『ケルトの薄明』(*The Celtic Twilight*)が、文化の違いを超えて、説話文学の一般的な形として、芥川の中で有機的に結合していることを示すことができた。芥川が活用した材源を確定し、芥川のテキストとの関連を分析し、材源となったテキストの受容と変容が持つ意義を明らかにしたところに、芥川研究に対する本論文の貢献を見ることができる。

本論文は序論、第1章「歴史小説と口承文芸」、第2章「堺利彦の *News from Nowhere* 翻訳」、第3章「ユートピア小説論」、第4章「芥川龍之介の「理知」に関する同時代言説」、第5章「「歯車」の先行研究と内容分析」、結論から成る。

序論では、芥川の世界性において芸術至上主義と社会思想は、先行研究で言われてきたほど厳格に区分できるだろうか、という問題提起がなされ、両者が不可分に結びついている様子を、小説の構造に注目することによって明らかにする、という本論文の目標が示される。吉田精一、中村光夫、前田愛の世界性論と、鶴見俊輔、池田浩士の大衆文学研究を紹介した上で、ジェイムソンのジャンル論に準拠しつつ、議論を進めることが述べられる。

第1章「歴史小説と口承文芸」は、歴史に取材した小説に対する芥川の世界性を、武者小路実篤や倉田百三と対比させて論じる。自己完結した世界観を提示する傾向のある白樺派とは異なり、芥川は多様性と他者性を重視し、『今昔物語集』にそれらが現れていることを見てとった。芳賀矢一、藤岡作太郎、南方熊楠の『今昔物語集』研究

から刺激を受けつつ、芥川は『今昔物語集』に「brutality（野性）の美しさ」を見出した。洗練された文学ではなく、感情の粗野な表現に関心を寄せた芥川にとって、『ケルトの薄明』に代表されるイエイツの伝説集と神秘主義思想も、同じような刺激の源として意味を持った。日夏耿之介や山宮允など、芥川とともにアイルランド文学研究会を構成した人々のイエイツ受容を踏まえながら、自然科学の過度の発展に懸念を表明したイエイツに、芥川が共感していたことを明らかにする。

第2章「堺利彦の *News from Nowhere* 翻訳」は、芥川が「ユートピア・ロマンス」というジャンルを意識していたことを示すための前段階として、ウィリアム・モリスのユートピア小説が日本に流入した経緯を、堺利彦の翻訳を中心に検証する。また、堺が *News from Nowhere* のパロディーを執筆したことをもとに、現実と理想の両方を相対化する視点が生まれていたことを指摘する。

第3章「ユートピア小説論」は、本間久雄の民衆芸術論を概観した後、芥川が東京帝国大学の卒業論文で、社会主義者としてのモリスに触れなかったのは、時間的な余裕がなかったからであり、芥川がモリスを詩人と社会主義者の両面から理解したことを、諸資料に基づいて論証する。また、佐藤春夫の「美しき町」は、現状に対して問題提起をするユートピア小説として、堺利彦の仕事の延長線上にあるが、現状を相対化する視点そのものを相対化する姿勢は見られない。これに対して、芥川の「河童」は、横光利一が「バラバラした所に矢張り張マトマリがある」と評したように、社会問題の羅列と自己矛盾を抱えた登場人物の配置が計算した上でなされており、統一性の欠如を通して、「河童」に描かれた社会の限界を表現している、と指摘する。

第4章「芥川龍之介の「理知」に関する同時代言説」は、晩年の芥川が自然主義的な小説を書くようになったのは、力量不足が原因である、という先行研究に見直しを迫る。加藤武雄、宮島新三郎、千葉亀雄の芥川評に、「理知」という言葉が見えることに注目し、自己完結した世界観を提示する小説の形式を、芥川が崩そうとしていた、という説が示される。

第5章「「歯車」の先行研究と内容分析」は、第4章で提出された説の妥当性を検証するために、「歯車」の分析を行う。「歯車」を評して、広津和郎が「冷静に且つ芸術的に描いて行つた」と述べ、日夏耿之介が「人情の埒を離れた冷たいものを感じた」と書いたことを踏まえて、有機的な連関を持たないように、断絶した場面をたたみかける「歯車」の構造そのものに、「機械的な」社会を描こうとした芥川の様子が現れている、とする。

結論として、説話文学に象徴されるような「有機的な」社会に回帰するのではなく、あるいは、ユートピア小説を書くことによって問題を提起し続けるのでもなく、関係性の希薄な、冷たい「機械的な」社会を描くことを、芥川は作家として選び取った、とまとめている。

審査委員会では、第2章と第3章に興味深い指摘と発見が見られるということについて、意見の一致を見た。芥川を取り巻く文化的環境として、イエイツの神秘主義思想、エドワード・ベラミーとモリス、堺利彦、佐藤春夫が持つ意義を、諸資料を調査して、その詳細を明らかにしたことは大きな収穫として評価したい。一方で、歴史、ジャンル、プロットなどの用語の定義に揺れのある箇所が一部に見受けられた。また、第4章と第5章には、説明不足と思われる議論が散見された。しかし、本論文で示された調査および分析能力を鑑みて、審査委員会では、論文提出者が研究者として十分に自立できる水準に達していると判断した。

以上の審査結果を踏まえて、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。